に、粉乳の溶解度をたかめる目的で、森永ミルクの徳島工場で原料乳に「第二燐酸ソーダ」として添加したものに不純物として砒素化合物が混入していたというのであった。この添加物は日本軽金属清水工場の産業廃棄物であって、次々に業者の手を経るうちに精製された「第二燐酸ソーダ」に化けてしまって、そのなかに砒素、バナジュウム、ふっ素などを含んでいたというわけで、昭和三〇年（一九五五）の八月から一〇月にかけての砒素ミルクによる乳児の患者数は九、七一八人で、死亡者は六〇人で、今もなお後遺症の残る人々がいる。

職場の砒素癌は昭和五五年までに四一例ある。

なお、最近の先端的な半導体製造ではアルシン（砒化水素）の使用が注目される。

（労働科学研究所）

解剖学者河口信任の河口家家譜

川島恂二

河口信任の河口家は河口良庵を師とする。即ち、良庵が三十八歳長崎住でカスパル外科で活躍中に、京都から長崎に遊学した野田房頼は良庵師に入門をして、見込まれて、二十三歳で養子にさせられて河口房頼となり、良庵の良を貰って師より良閑の名と免許皆伝（カスパル医学縁起記と、別に、免許皆伝）を得た。

由来、野田→河口家は京の実家の地に戻った処、名医の誉れが高かったので、土井藩に召抱えられ、その孫信任が長崎栗崎道意に学んで栗崎流医学も修めて、後年、京都で解剖を行い蘭書の正しきを知って「解屍編」を刊行した。杉田玄白の解体新書に先だつこと二年。信任の孫は、玄白に入門し、曽孫は兄は成卿、玄朴、弟は玄朴、諭吉に学び、本邦の名医家となった。

処が、良庵は子供がないので、無理矢理に野田氏を養子

にとったと考えられてきたが、近年になり、実は先妻林氏との間に河口昱友こと後の宮崎元仲がいた事がその子孫（伊豆韮山で医を廃して現在農）から判った。

又、後妻を京に貰って温良庵こと河口良仙にカスパル医学を継がせたが、余りに若輩と未熟練の為に自然廃絶したことが判った。

又、良庵の生歿年も宮崎元仲なる長男方のカスパル免許皆伝と家譜から生歿年が判って、寛永六年生れ貞享四年五十九歳伊予大洲の故郷に歿したらしい事も判明した。

良庵は大洲の人であるが、寛永六年松浦郡に生れ、父の勤める松浦氏の平戸城の小姓となった時に、即ち十何歳かで刑人となり、平戸を追放されて長崎に逃れた。それは、恐らく切支丹に入門した事が露見をしたが、子供だったので、追放で済んだのであろう。

長崎で林氏と結婚したのは、捕手にねらわれたら妻の中国に逃亡を企てる覚悟をした上での、方法手段上の結婚であったのであろう。

然し、その後は露見を免れて京都に出て、繁昌をすると、京美人に憧れて、先妻を長崎に離して、京に後妻をとったものと思われる。（男の生甲斐）

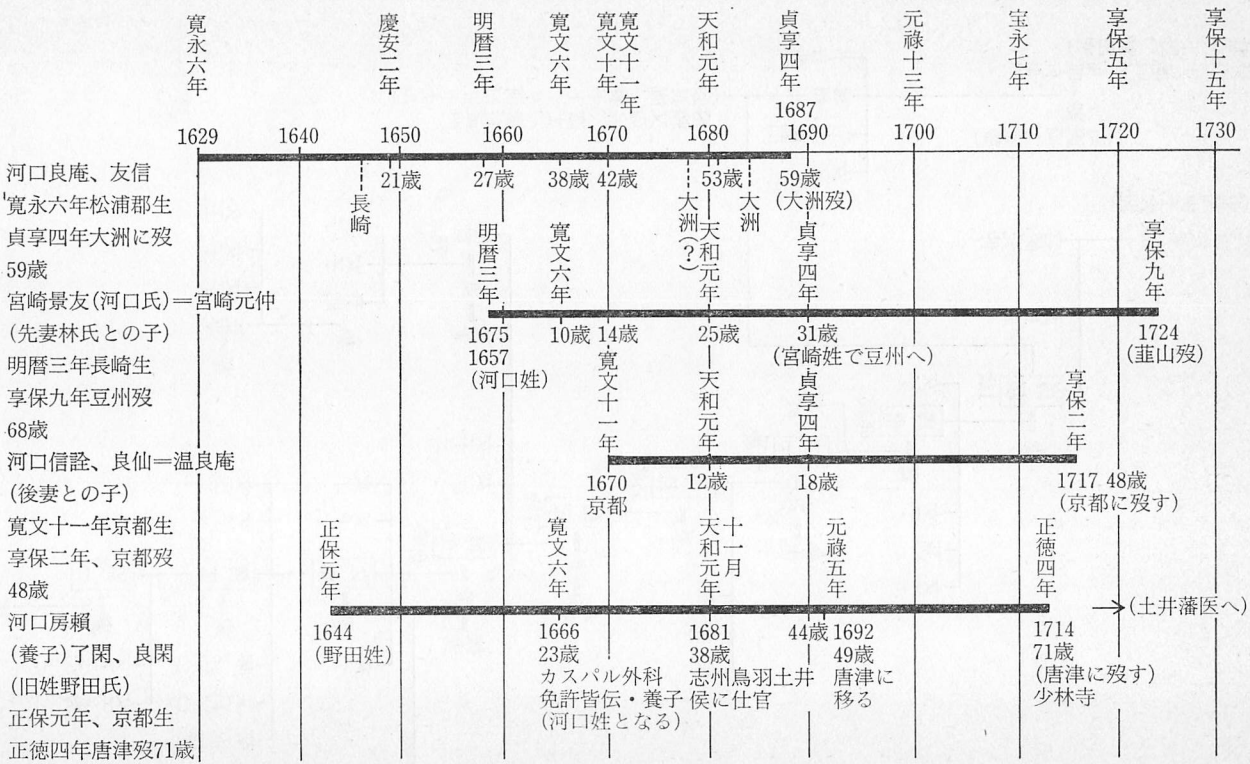
後妻の子を溺愛してカスパル医学を教えたが子の信詮こと良仙、通称温良庵が十二歳の折、その頼みとした養子河口良閑は土井藩に召されてしまった。

それで失意の内に大洲城に戻って（五十五歳前後）、約五年の後、五十九歳で大洲に歿したものと思われる。

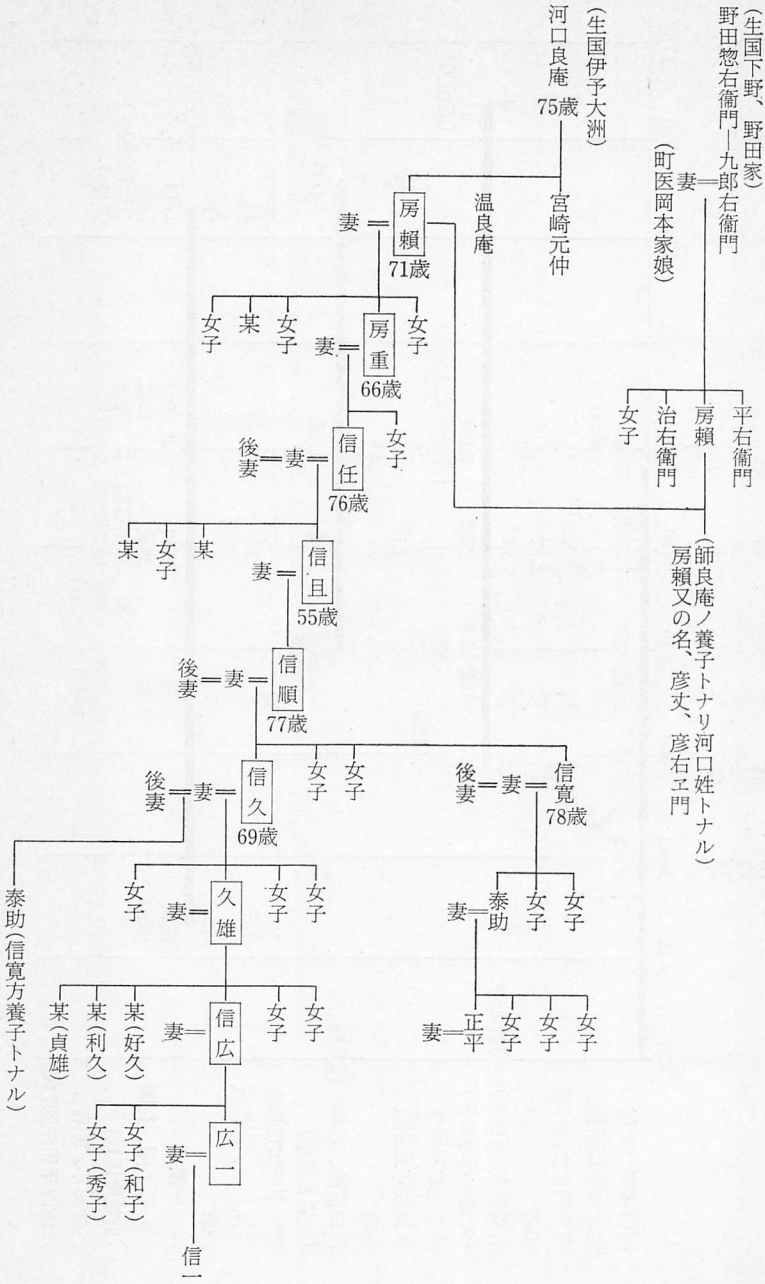
この大洲帰郷の折に、五冊からなる「外科要訣全書」を書いたらしく（伊予大洲城医官河口良庵㊞）今、古河の河口家に残ったのは、良庵師の死の年頃、又は葬に、房頼は鳥羽城から船で行き「外科要訣全書」をさづかったと考える。

良庵五十九歳歿の年は、長男元仲は三十一歳、異母の次男良仙は十八歳、養子の良閑は四十四歳（土井侯臣）であった。

それで良仙は良庵師から急に色々と免許皆伝やら奥義を受けたが、未だ十八歳の若輩であったから、良庵師期待通りには学は捗々しなかった。それで温良庵は重圧に耐え兼ねて折角、良庵の指導をうけ正統河口家を継いだが、実力が伴わなかったので享保二年四十八歳で京に歿して、医は


寛永六年
慶安二年
明暦三年
寛文六年
寛文十一年
寛文十年
天和元年
貞享四年
元禄十三年
宝永七年
享保五年
享保十五年
1629
1640
1650
1660
1670
1680
1687
1690
1700
1710
1720
1730
河口良庵、友信
寛永六年松浦郡生
貞享四年大洲に歿
59歳
宮崎景友(河口氏)＝宮崎元仲
(先妻林氏との子)
明暦三年長崎生
享保九年豆州歿
68歳
河口信詮、良仙＝温良庵
(後妻との子)
寛文十一年京都生
享保二年、京都歿
48歳
河口房頼
(養子)了閑、良閑
(旧姓野田氏)
正保元年、京都生
正徳四年唐津歿71歳
長崎
21歳
27歳
明暦三年
1675
1657
(河口姓)
38歳
寛文六年
10歳
42歳
14歳
寛文十一年
1670
京都
53歳
大洲(?)
天和元年
25歳
12歳
十一月
大洲
59歳
(大洲歿)
貞享四年
31歳
(宮崎姓で豆州へ)
18歳
元禄五年
享保九年
1724
(韮山歿)
享保二年
1717
48歳
(京都に歿す)
正徳四年
(土井藩医へ)
正保元年
1644
(野田姓)
寛文六年
1666
23歳
カスパル外科
免許皆伝・養子
(河口姓となる)
1681
38歳
志州鳥羽土井
侯に仕官
44歳
1692
49歳
唐津に
移る
1714
71歳
(唐津に歿す)
少林寺

（古河）河口家譜（河口信任系）



終った。

長男元仲も、次男温良庵も、その学習青年時代が短期未熟であった為にやがて終焉の運命を辿り（速成栽培成らず）、一人、養子として迎え入れられた良閑を祖とする河口家のみが、代々土井藩御側医を守り、中の一人、河口信任は蘭書を得て解剖書『解屍編』（一七七二）を京に刊行し、河口信順は杉田玄白の弟子となり玄白晩年の清曠憐に起居し、『蘭東事始』の筆写者の一人、富山の長崎浩斎と親交あり、又、「大解嘲」を筆写した。河口信寛は杉田成卿の門人となり「梅里余稿」「梅里遺稿」を編輯し、大学東校教授補となった。

それらの系譜を整理して発表する。

（古河市・開業）

大槻玄沢『蘭畹摘芳』について

宗田　一

大槻玄沢の西洋物産学に関する著訳書としては、『六物新志』とその続編ともいうべき性格の『蘭畹摘芳』がある。前者は木村蒹葭堂の『一角纂考』とセットにして、蒹葭堂蔵版で上梓された〔天明八年（一七八八）に知友に頒布された後、寛政七年（一七九五）に市販本となった。流布本には同年正月の奥付をもつが版元の異なる二種の版本がある。蔦屋重三郎の名がないのが後版である。〕

後者は初編三巻が上梓（文化一四年、一八一七）され、次篇三巻の目次の予告があり、第五編までの刊行が計画されていたが、未刊にとどまった。刊行中絶の理由は奈辺にあったのか、また刊行開始時点で稿本の定本があったのか否かも検討されねばならない。